「～らしさ」志向

おやさと研究所教授
森　洋明　*Yomei Mori*

今年３月、１年半ぶりにコンゴ共和国を訪れた。10 日間といういつもに比べると短い滞在であったが、それでも多くの新たな「発見」があった。とくに今回は、私のコンゴ行きに合わせて、大学のフランス語の教え子のＹ君が初めてコンゴを訪問したので、彼がさまざまな体験をする様子を見つつ、私自身が再発見できた滞在でもあった。ただ、そのなかで「～らしさ」をどこかで追い求めていることにも気づかされた。

2014 年に完成したマヤマヤ空港は、サテライトの設備があり照明の明るい通路はクーラーが効いているのが「普通」となった。初めて来た人に味わってもらいたい「コンゴらしさ」がなくなってしまったのである。以前の空港を知っている者にとっては、何かもう一つインパクトが足りない。かつては、機内からタラップに出てムッとした生暖かい空気に触れてまず「コンゴ」を感じたものだ。軍の警備に見張られるなかタラップを降り、歩いて空港建物に向かいそこで入国審査を受けるのだが、降りたった人たちが我先にとパスポートを手にして人だかりができていた。屋内はエアコンは機能せず、光っている蛍光灯もまばらで薄暗い。皆が大声で叫び、誰が空港職員なのか分からない。不安と緊張のなかで入国を果たしたものだった。

コンゴ川沿いの新しい道

現在の空港の前には、ソーラーシステムによる街灯を備えた道路、ロータリーの中央にはライトアップされた噴水があり、高級ホテルも建設された。街の中心部では、コンゴ川に面して片側２車線の整備された舗装道路が延び、歩道ではランニングする人や散歩する人で賑わっている。夜になると、対岸のキンシャサの夜景を見ることができ、デートスポットにもなっているようだ。スーパーマーケットは「ショッピングモール」となり、地下駐車場を備え、フランス系の大型書店やスポーツ店が出店、クレジットカード払いも可能になった。フランス在住のＹ君にとって、それはフランスの「普通」の光景であったことだろう。

中心地で建設ラッシュが進む一方、庶民の生活が豊かになっているかと言えば、むしろ悪くなっているように感じられた。原因は石油の国際価格の下落による国の経済の悪化である。産油国のコンゴは、その国家予算の大半を石油に依存している。したがって、石油価格は国家予算に直結した問題である。2014 年、コンゴ共和国の経済成長率は石油価格の下落により６％から 1.2% に低下した。年金の遅配、公務員や教員の給与の未払いが数カ月続くなど、人々の生活にも直接に影響し始めている。給与が半年以上も支払われていない窮状を訴える運輸省関連の公務員が「これがコンゴだ」と言った。彼らにもどこかで抱く「コンゴらしさ」のイメージがあるのかもしれない。

これまでの経済成長の波に乗って、私立の学校が乱立していたが、昨今は授業料を払えない親が無償の公立に転校させるといったケースも多くなり、教育環境がもともと良くなかった公立学校ではさらに多くの子どもたちで溢れかえっているようだ。また、産油国であるのにガソリンの供給が滞り、スタンドには車の長蛇の列ができていた。銀行では現金の供給が滞っているようで、あちらこちらの銀行の預金引き出し窓口には人が列をなしている。80 年代にコンゴに常駐していた頃、銀行からお金を引き出すだけのことなのに半日も要した頃が懐かしい。私にとっての「コンゴらしさ」が少し蘇ってきた。

生活文化、とくに食の面では「コンゴらしさ」が満載だった。現地語で「ンツォンベ」と呼ばれている幼虫や、それによく似ているが足のある「マフンジ」と呼ばれているもの、あるいは緑色の幼虫「ミチナ」や羽虫のような「ンブイラ」など、Ｙ君にさまざまなローカルな味がふるまわれた。市場では、コウモリやハリネズミ、サルの燻製なども売られている。コンゴ人にとっては貴重で高級な食材だろうが、日本人にはなかなか食べることが難しいのではないだろうか。それは日本に来たコンゴ人が、鰻料理を苦手としたり、生卵や刺身を食べないのと同じことである。ナマコやタコも「食べるもの」という感覚があるから美味しく感じるのかもしれないが、よく見ればその姿はかなりグロテスクだ。虫たちも「食べるもの」という視点があれば見方も変わるのかもしれない。実際、緑の幼虫は、かめばかむほどエビに近いような味だった。「虫を食べている」という意識がその味に影響するのかもしれない。

「マフンジ」

「普通は食べない」という意識は先入観であり、それはまた「～らしさ」と通じる視点でもある。「～らしさ」には、「そうあるべき姿」が予め決まっている。たとえば、観光の多くはこうしたことで成り立っている。美食でおしゃれなフランスや大自然のアフリカ、和食に着物の日本など「～らしさ」が人を惹きつける。高層ビルのアフリカの都市や移民が多いパリの街は「らしく」ない。結局、追い求める「らしさ」は、すでにすり込まれた先入観やステレオタイプとの呼応する風景なのである。

路上の屋台で日本から持ってきたスマホの SIM カードを入れ替え、コンゴの回線に切り替えた。登録手続きもネット回線でなされ、わずか数分の作業だった。大がかりな店舗ではなく、路上で携帯一つで手続きを済ませることにＹ君も私も驚いたが、それはやはり「コンゴらしくなかった」からであろう。手続きをしてくれた青年は、驚く私たちを横目に「これが普通」と言わんばかりの様子だった。社会の変化は「らしさ」の変化でもある。アフリカの地域社会・文化を学生に伝える私にはこの「らしさ」と「らしくない」姿のバランスが難しい。

携帯電話ショップ

Ｙ君がフランス語を学ぶことになったきっかけが、高校の授業でコンゴ人と出会ったことであった。だから、彼にとってコンゴに行くのは長年の夢だった。彼が抱いていたコンゴだったのかどうか、イメージ通りでもそうでなくても、多くの発見をしたと思う。苦笑いしながらも、出された虫に果敢に「挑戦」した彼には、彼なりの「コンゴらしさ」ができたのではないだろうか。